

## たごえて桜のなかりせば

「ねえねえ姉様たち。もうすぐ門が開くよ！」

「あらそう。もうそんな時間？」

元気な子供の声に、のんびりとした声が応じる。

「今日は本当にいい天気ね。いっぱい人がくるかしら？」

「あなたは賑やかなのが好きよね」

「でも私、カラオケなんかは嫌いよ。巧いならまだしも、ちつとも巧くない歌はいらいらするんだもの」

「あら、でもあなた、時々一緒に歌いたそうにしてるじゃない」

誰かの声と言って、周囲がどつと笑い声をあげた。からかわれた方は膨れてそつぽを向いたようだった。

「ねえ、今日はワンちゃん来るかな！」

「来るかな？ 昨日ね、すごくかわいいわんちゃんが居たんだよ！」

笑い声を縫うようにして、先ほどよりずっと幼い子供たちが声を張り上げた。意気込んで報告する二つの声は、よく耳を澄ましていなければわからないほどにそっくりだ。

「そうね、今日も来てくれるといいわね」

「でもあなたたち、あんまりはしゃいでしまつてはダメよ。」

二人ともまだ小さいんだから。いいわね？」

言い聞かせる風の少し固い声に、幼い二つの声は、はあいと呟いた。

朝日を含んだ風が吹き抜けていく。それは冬の名残かまだ冷たく、そして少しばかり強かった。

「きゃああ！ ヤダ、ヤダもう！！ なんて風なんか吹くのよ！」

「うるっさいわね、風くらい吹くわよ！」

上がった悲鳴に被せるように、他の声が怒鳴った。

「だって、あたしの状況知ってるでしょ！ 今風なんか吹かれたら最悪じゃないの！」

怒鳴られた方も負けじと声をはりあげる。売り言葉に買い言葉で、声色はだんだんと激しさを増していく。

「だいたいね、あなたが無駄な見栄はつて、一番乗りとかやったのが原因でしょ！」

「いいじゃない！ 一番じゃなきゃおもしろくないわ！」

「だったら、最初に終わるのが道理ってもんでしょ。喜んだら？ 一番にシーズン終えるって！」

「イ・ヤ・よ！ 一番最後まで、一番綺麗だって言われたいのよ！」

キイ、と甲高い言葉の応酬は、つかみ合いになつても何ら不思議のないほどだ。

「一番になりたいつてすごいよねえ、頑張りやさんだよねえ」

その間に、無謀とも言える暢気さで声の一つ割り込んだ。  
「あんたは、トロすぎでしょ」

「この時期にまだ準備終わってないとか、正直あり得ないから。ていうかあんた、本気で間に合うの？」

即座に反論した二つの声は、今の今まで相手を罵りあっていたとは思えないほどに息のあつたつこみを入れる。

「もう少し、もう少しでいいから急ぎなさいよ。そりゃあ、空気が読まずに先走るのもどうかと思うけど、みんながそろそろ終わりごろにスタートって、遅すぎるから」

「あんたさ、あたしと同じくらいに準備始めて、ようやくみんなと同じぐらいのトロさなの、いい加減自覚しなよ」

「ええ？ そうかなあ？ 今年もちゃんと追いつける予定なんだけど……」

矛先を向けられた声は、少し不満そうに反論した。

「大丈夫だと思っただけど。ダメ？」

「ダメに決まってるでしょ！」

「そもそもね」

「おまえたち、そこまでにしときな」

言い募る出鼻を挫く形で、声がかかった。荒げる風もない、静かな老婆の声だ。けれどそれは鶴の一声のごとく場を収めてしまった。

「他に抜きこんでる心意気は大事だけどね、早いだの遅いだの、一番だの二番だの、そんな細かいところで張り合ってるよう

じゃ、いつまでたつても一人前にはなれないよ」

ピンと一本筋の通った声には、反論など許さないだけの貫禄があった。

「いいかい、今やることはね、目の前のお客さんたちに目いっぱいいたのしんでもらうことだよ。気を抜くんじゃないよ。手を抜くなんてあり得ない話だよ。今自分ができる一番綺麗などころを、胸張ってみせてやるんだ。いいね？」

騒いでいた声も、子供たちも、それから静かに様子を見守っていた残りのものも、一斉に頷いた。

「さあ、時間だよ」

リンゴン、と、どこか遠くで鐘が鳴った。9時を告げる音。

同時に、広い公園を囲む門扉がすべて解放される。

食べ物飲み物の入った鞆や、敷物の固まりを携えた人々が、走りだそうとする子供の手を引いた人々が、一斉にやってくる。

見事な枝振りの老木のもとへ、すらりと立つ大木の元へ、六分咲きの若木の元へ、まだまだ小さな細木たちのもとへ。そして、すでに緑の新芽をのぞかせ始めている木のところへも。

吹き抜けていく柔らかな風に、公園中に植えられた桜の木々たちは、さあごらん、とばかりに花咲く枝を揺らして見せた。